内村鑑三の罪に対する認識の変化
── 1886年の贖罪理解に至るまでの分析 ──

ティエリ・リチャーズ

はじめに

洗礼を受けてから15年後の1893年、内村鑑三は『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』という長文の英文著作を発表している[1]。彼はその中でこう述べている。

> 「そうです、キリスト教を私たちは必要としているのです。〔……〕それによってこそ、はじめて私たちは罪を確信できるのです。罪を私たちに確信させるということは、私たちが罪を乗り越え征服する助けとなります。」[2]

しかし、こうした罪に関する理解は、何もないところから生まれたものではない。内村のクリスチャンになった後の人格や世界観のすべてがキリスト教の影響によると想像するよりも、内村の既存の人格や世界観をイエスのメッセージがどのように変容させたかを確認したい[3]。

私は内村が後に「罪」と表現し、彼の幼少期には同じ特徴に関して表現するために用いていた「良心」(conscience) という言葉に注目したい。この良心という題材で彼の幼少期から1886年の贖罪の理解までの過程を追う事ができるとともに、そこから聖書、次に彼の家族、そして友人関係という視点でその変化を捉えていきたい。この順で見ていく理由は、彼の良心に対する変化が聖書により深く従事することに繋がり、その結果、家族への見方が変化し、さらに友情への見方にも変化がもたらされたからである。また、私自

身がイギリス人であることから、内村の罪の意識の変化をイギリスとの比較も含めて評価することで、独自の視点も加えたい。

1．良心

内村にとって良心とは、人が神聖な存在を感じ、応答し、さらにはその声を聞くところであった[4]。つまり、良心は人間と神とのコミュニケーションをするところである。実際、内村はクリスチャンになってから15年後の1893年に、クリスチャンになる前の高崎での幼少時代にあった良心との葛藤を振り返り、こう記している。

> 「そうなると悲惨なのは、どの神をも満足させようとする良心的人間の場合です。」[5]
>
> 「それで私は、祈りを唱えるわずらわしさから良心の咎めなく逃れるために、社寺の数の少ない遠回りの道を選んだものです。」[6]

彼の良心的な魂は、複数の神を満足させなければならないのに、それができないことで悩んでいた。彼の良心は、彼の呼ぶところの罪の意識によって祈りを捧げなければならないことを知らせたが、彼自身はそれを望まなかったので、寺院の前を通り過ぎるのを避けた。

1877年、札幌農学校に入学するために札幌へ引っ越した内村は、強烈な方法でキリスト教を突きつけられた。1年生のときにWilliam S. Clarkの影響でクリスチャンになった2年生が、内村を含む1年生にキリスト教を受け入れるよう強引に説得したのである。内村は、この2年生に反発しながらも、最終的には「イエスを信ずる者の契約」に署名したことを語っている。しかし、それは強制されたようなもので、自分の良心に反する行為であったと説明する。

> 「ご覧のように、私のキリスト教への第一歩は、私の意志に反して強制されたものでした。また、良心にもいくらか反していた点も告白しなく

てはなりません。」(7)

しかし、内村は、契約書に署名することは自分の良心に反する行為だと感じていたにもかかわらず、契約書に署名した途端、自分の良心にある意識が変化したことを述べている。内村は、唯一の神をもつようになったことで、これまでのように様々な神を喜ばせようと様々な形式の礼拝をする必要がなくなり、自分の良心と魂が喜んだと説明している。

「私の理性と良心はともに、これに『しかり！』と賛意を表したのであります。カミは一つであり多数でないことは、私の小さな魂にとり文字どおり喜ばしきおとずれでありました。」(8)

そして、内村は自分の良心が明確になったという表現を使った。

「頭をまっすぐに立て晴れやかな心［conscience］で、私はどんなに昂然と次々と神社の前を通り過ぎて行ったことでしょう。私を支え見守る神々のなかのカミを見出したのですから、もはや祈りを唱えなくても罰のあたることはないのだ、との確信に充ちていたのでありました。」(9)

内村は、契約書に署名をしてから数か月間、契約書の規定に従って生活するようになった。そのため、日曜日の教会に通い始めた。内村は、日曜日の教会で聖書を読み学ぶことによって、聖書で求められていることを自分が行っていないことに気づくようになり、良心が痛んだと述べている。

「三月三十一日　日曜日　Ot の部屋で教会。夜の聖句は実に興味深かった。その聖句はロマ書第十二章であったと思います。私たちは『汝の仇飢えなば之に食わせ』るような気持にはなっていなかったから、いたく良心を突き刺されました。」(10)

1878 年 6 月 2 日、内村は洗礼を受け、それから 5 週間の間に二度、劇場に足を運んだ。しかし、内村はそれらの機会で劇場に足を運んだ際、良心に傷つかないという確信がなかったことを述べている。その理由は、イエスを信

ずる者の契約に署名して以来得た喜び、つまり明確な良心が、今、劇場に通うことによって脅かされているからである[11]。

アメリカでも、内村は1884年の冬から病院に勤務し、厳しい規律ある生活で良心の呵責を和らげようとした。しかし、そのことで自分の自己中心さや罪深さに打ち克つことができないことを、さらに思い知らされることになった[12]。やがて内村はアマースト大学に入学し、そこで神との平和を見出すための旅が始まった。そして、1886年3月8日、内村は、キリストの贖罪がより明確に示されたことで、これまでの純真さと罪への葛藤が解決されたことを述べている[13]。実際、1888年12月4日、内村はアマーストの授業で、イエス・キリストを通して、自分の人生を通して経験した「道徳的分裂」を和解させる方法である「真理」を見出すに至ったことを話した[14]。その同じ魂、その良心的な魂は、内村の子ども時代には悲しく、悩み、無力であったが、今や神によって神と和解させられたのである[15]。

内村の良心の視点は、次のような問題を提起することになる。それは現代のイギリスの学生がクリスチャンになる過程について考察する際に、内村の事例がどの程度参考になるのかという問題である。20年ほど前、オックスフォード大学の学生を多く受け入れているオックスフォードの中心部にある教会の牧師にインタビューしたことがある。その牧師は、1986年から1998年まで牧師を務めた前任者が、1980年代にはオックスフォードで学生生活を始めた最初の週末に、多くの学生がクリスチャンになるのをよく目にしたと説明してくれた。その理由を、「彼らはキリスト教の道徳観の中で育ってきたが、恵みのメッセージを明確に理解していなかったからだ」と説明した。そこで、恵みのメッセージを聞いて、はっきりと理解したときに、多くの人がクリスチャンになったのだという。この罪の認識の変化は、1886年に内村がアマーストで得たものとよく似ている。しかし、彼が牧師になった1998年からその後20年以上にわたって、オックスフォード大学の1年生の宗教的理解に劇的な変化を感じたと、牧師は続けて説明した。世俗化の進行、ポストモダニズム、国際化などの流れの中で、キリスト教的世界観や道徳的枠組みの中で育つ学生が非常に少なくなっていたのである。そのため、牧師と

しての彼の仕事は、まず最初に一神教について説き、次に恵みについて教えることであった。このように、内村鑑三に見られるような、一神教への改宗から恵みの理解までに起こった罪の理解の変化の例は、イギリスの学生にとって自分たちの先輩の改宗の例よりも、更に参考になる模範なのかもしれない。

2. 聖書

1873 年から 1877 年まで内村は東京で、教会音楽やキリスト教の話、クリスチャンから親切にされたことを観光として楽しんだと述べている(16)。しかし、1877 年に内村が札幌農学校へ入学するため東京から札幌へと移ると、単なる娯楽としてではなく、自身の信仰としてキリスト教を受け入れることを求められた。内村はその時突然、キリスト教を楽しみとして捉えるのではなくそれに反対するようになったことを記している。そして、聖書の教えである「日曜日に働くべきではない」という教えを突き付けられると、それは自分には大きすぎる犠牲だと思ったという。さらに、内村は幼い頃から、自分の国を何よりも尊び、自分の国の神々を崇拝し、他の神を崇拝しないことが正しいと学んできたことを説明する。聖書の教えのように、これを実行しないことは、彼の理解では祖国への裏切り者に等しいものであった。それに加えて、内村が自分の人生に対して抱いていた高貴な志も、幼いころに学んだ義務や愛国心という考え方に基づくものであった。聖書の教えは、内村がこれまで学んできたこと、内村の生き方や志の基礎となるものと真っ向から対立していたため、彼はそれを受け入れることに抵抗したのである(17)。

しかし、内村は「イエスを信ずる者の契約」という、聖書の言葉を実践する誓いに署名した。内村はこの契約書に署名することによって、「彼（キリスト）の言葉と霊による教えを厳格に順守して生きる」ことを約束したのである。内村は「聖書は、神から人への言語による唯一の直接の啓示であり、唯一の完全で誤りのない輝かしい命への導きであると信じる」と告白したことになる(18)。

実際、内村はこの誓約書に署名することで、聖書の教える新しい道徳、十戒を守ることを約束したのである。十戒を列挙する前に、契約書には次のように書かれている。「次に記す戒めは我等如何なる辛酸をなむるとも終身是を服膺履行せんことを約す」[19]。内村はこの十戒にある父と母を敬えという教えが、自分が育ってきた儒教の道徳に似ていると述べている。しかし、姦通に関する戒めは、内村が育ってきた環境の姦通を容認するような道徳観とは大きく異なるものであった。内村の罪に対する意識と理解は、聖書の教えと出合い、受け入れることで急速に変化していった。

その後、札幌農学校での数か月から数年間、内村は毎週日曜日に聖書を読み、学ぶようになった。そうするうちに、明らかに彼の罪に対する意識はさらに変化していったことが、ある日曜日の朝にローマ人への手紙12章を読み学んだ時に罪を確信したエピソードからもわかる[20]。実際、内村は在学中の4年間にアメリカ人のピューリタン、アルバート・バーンズ(1798－1870)による新約聖書の註解書を一字一句読み切ったことを述べている[21]。これらの註解書の現代版は、英文で1766ページにも及ぶ[22]。内村は、この解説書が特に役に立ったと述べており、バーンズの深い霊性とピューリタンからの理解が内村自身の理解に大きな影響を与えた[23]。

しかし、内村は、聖書が教える罪についての理解を深めていくと同時に、自分の努力では神の律法に書かれていることを守れないこともさらに認識するようになった[24]。内村は、キリスト教の安息日を守ろうと努力したものの誘惑に負けたことを語っている。そしてローマ人への手紙7章を振り返り、使徒パウロが神の正しい律法と人間の罪深い肉という、まさに同じ問題と葛藤していることを述べている[25]。

内村は、1886年3月8日にアマースト大学でその葛藤が頂点に達するまで、聖書の教えにあるこの側面について理解を深めていった。内村は後年、特にローマ書を読んで、キリストがいかに自分の罪のすべてを贖われたかを理解することができたと説明している[26]。

聖書の一神教を受け入れたことで、自分では満足させきれない多くの神々ではなく、ただ一人の神を喜ばせればよいということが、内村に大きな霊的

自由をもたらしたようである。しかしこの自由が、日常生活でより厳しい規則に従うという「契約」に署名をしたことで、どのように影響を受けたかを考えるのは興味深い。内村は契約書への署名によって日曜日に仕事をしない、日曜日に教会に行くだけでなく祈禱会にも出席する、日々罪を犯さないようにする、など多くの規則に従うこととなった。それまでの彼の性格から予想されるように、彼はこれを徹底して守ろうとした。自分の魂に悪影響を与える可能性があると考え、劇場に行くことさえやめたほどだ。しかし、聖書の教えを体系的に理解し、それに従うための「契約書」が、かえって内村のキリスト教徒としての挫折感を助長し、1886 年のアマーストでその挫折感は頂点に達したと言えるかもしれない。一神教から得られた自由が、「イエスを信ずる者の契約」からの要求に従うことで危機に陥った。

3. 家族

内村の父は儒学者であったと言えるであろう。彼は儒教の古典を大量に暗記していた。内村がまだ 5 歳のとき、父親から「孝経」「大学」「孟子」などの儒教の古典を与えられた。内村は、これらの儒教の価値観である、親への忠誠、教師への忠誠、主への忠誠が、幼少期の道徳の基本であったことを述べている。

内村の回想によると、彼の父親の宗教への関わり方は興味深いものであった。内村は、父親が神々や先祖の霊を、時間がたくさんある人たちだと馬鹿にすることがあったと書いている。そして内村は、父親が宗教を心から信じるのではなく、時に計算された論理で捉えていたことに驚いたと述べている(27)。

1878 年にキリスト教徒となった内村は、すぐに自分が宣教師であると自覚するようになったと述べている。それは、内村がキリスト教を受け入れる前に直面していた問題、つまり罪と神の裁きの問題を、周囲の人々が同じように抱えていると理解したからである(28)。実際、内村は大学のあった札幌の地区の神を祭る日に、大きな苦悩を感じていた。使徒 17 章に記されている

アテネの偶像崇拝に対するパウロの態度を想起するように、内村は日本の伝統的な宗教的な祭りに苦悩を感じていたのである[29]。

実際、このような神の御前における周囲の人々の状態には、内村の家族の罪と、彼らに対する神の裁きも含まれていた。そのため、1879年の夏に内村は家族に会うために東京まで600マイルの旅に出た。内村は洗礼を受けていない魂はすべて永遠の裁きを受ける危機にあると考えるようになり、それには自分の家族も含まれると信じていたと説明している。そのため、家族に会いに行った目的は、イエス・キリストを伝えるためであった[30]。実際、内村は東京の自宅に着くと、それまで育ってきた家族の習慣に対する自分の態度が変わっていたと述べている。以前は敬虔な宗教家であった内村が、母が息子の無事の帰還を感謝して家の偶像に祈りと供物を捧げたとき、内村はこれを偶像崇拝だと捉え、母の行為は「わたしの心をいたく悲しませました」と述べた[31]。しかし、内村は家族の習慣を偶像崇拝と考える一方で、母の宗教性を否定的にのみ定義することにも葛藤を覚えていた。むしろ、母やその前の祖母の高潔さを認め続けていたのである。

1884年の秋、内村はアメリカへ旅立つ直前に、熱心なクリスチャンになっていた父に送り出された。父は内村のために神の守りを祈った後、内村の死んだ祖父に祈るために内村を家の仏壇に連れて行った。内村は、仏壇の前で祈ったり、反省したりする行為が仏教的と思われて顰蹙を買うかもしれないと述べている[32]。

内村は、キリスト教という新しい視点から両親や兄弟、先祖をどう見るかという課題を経験した。この点について、内村がキリスト教の「一般恩恵」の教義を明確に理解していれば、ずいぶん助けになっただろうと思う。特に、内村の両親の日本の伝統的な宗教観に対する正しくも誤りでもないという見解は、図らずもNiebuhrの「文化に対するキリスト」（日本の伝統的な宗教観は誤りである）あるいは「逆説のキリストと文化」（中立－日本の伝統的な宗教観は堕落した文化の一部にすぎない）という分類に則して議論していると考える[33]。このようなアプローチは、「2章からなる福音の提示」と表現することができ、そこでは、文化の在り方は間違っており、悔い改めが必要で

あり、正しい道であるキリストがそれにとって代わるべきだと言われる。しかし、「2章からなる福音の提示（間違っている、正しい)」ではなく、「4章からなる福音の提示（良いものとして造られた、堕落した、贖われた、完成された)」の方が、キリスト教会にとってより有益であろう。

そのように考える時、確かに家族の偶像崇拝は悪いことであるという必要はあるが、言うべきことはそれだけではないであろう(34)。私たちは、そこに良いものとして創造されたものの名残りがあり、今はそれが堕落した悪い目的のために使われていると言うこともできる。同様に、解決方法もまた、ただ世界の中のそのような「悪い」ものを取り除き、全く新しく純粋で「良い」ものを作り出す、ということだけではない。むしろ、世界の中の悪いものさえ、贖われ、悪い人々によって悪い目的のために用いられることから救い出され、元々意図されていた目的のために用いられる可能性があるのである。

4．友情

内村は、幼い頃から儒教の物語や教えの中で、「朋友の信」と「兄弟の和」が特徴として強く主張されていたと説明した(35)。内村は、友人に対して自分の真実性を証明する必要がある時、聖なる紙を食べることで自分を試すようにしばしば言った。この紙は、嘘をついた人が食べるとすぐに出血を引き起こすと言われていた(36)。このように、内村は幼い頃から、友情には誠実さと真実の両方が大切であると認識していたことが分かる。宮部金吾と新渡戸稲造は内村が札幌農学校へ進学する前の学生時代に出会い、共に札幌農学校へと進学した。内村は友情を大切にしていたため、宮部と新渡戸がクリスチャンになったことで内村自身もそれに倣わないことが難しくなった(37)。

内村は、キリスト教を受け入れ、「イエスを信ずる者の契約」に署名した後、1年生同士で行われた定期的なキリスト教の集会に参加するようになった。彼らはその中の一人の寝室に集まり、牧師の役割を交代で行い集会を導き説教をした。説教壇は小麦粉の樽で、内村はこの教会を「小麦粉樽の説教壇」と表現している(38)。内村は、この集会を通して、また共に教会を形成するこ

とで人間の罪深い性質について多くを学んだと感じている[39]。内村は、この教会のメンバーが、たまに純粋に神に祈るのではなく、互いの不満を吐き出すような祈りをささげていたことを述べている[40]。内村は、教会として共に集まった7人の兄弟たちの卒業日を振り返りながら、4年間の間にお互いをどれだけ愛し合うとともに、憎み合っていたかを語っている[41]。

洗礼を受けたとき、このクリスチャンの青年たちは、自分たちにつけるクリスチャンネームを選んだ。内村は、聖書に登場するヨナタンとダビデの友情にちなんで、ヨナタンという名前をつけた。このことは、内村がクリスチャンの名前を決める際、友情を最も大切なものとしていたことを表している[42]。内村は、この7人を兄弟よりも親密であると捉えていた。実際、内村はクリスチャン同士が兄弟よりも親密であるべきだと考えるようになった。これは、新約聖書のクリスチャンすべてに適用される必要不可欠な要素であると捉えていた[43]。

アメリカ滞在中、内村は、ペンシルベニアで自分を迎えてくれ、病院での仕事を提供してくれた医師のことを、生き生きと書いている。内村は、この医師の生き方の手本がなければ、内村のキリスト教は硬く冷たい、実践的でないものになっていただろうと説明している。むしろ、内村が友人の中で最も信頼していたと語るこの医師は、その友情を通して内村を人間味のある者にしてくれた人物であった[44]。

内村の最初の教会がなぜその方法をとったのか、またそれが内村の考え方にどう影響したかを考えるのは興味深い。内村の最初の教会、「小麦粉樽説教台」(後に札幌バンドと呼ばれる)は、日本における最も初期のプロテスタント・クリスチャンのグループの一つであった。これを教会開拓として捉えることもできるであろう。21世紀のアメリカやイギリスにおける教会開拓を考える時、多くの理論家は教会開拓に必要な段階を幅広い分野で項目分けし、それぞれの項目において必要な段階を説明する[45]。

最初のグループや中心チームは、その後の宣教の働きにおける文化を築く上で計り知れない重要性をもつ。内村の場合、最初の教会は学生たちである。そうすると、内村が焦点を当てている個人の罪深さや個人の回心は、この学

生たちにとっては効果的かつキリスト教の重要な側面であるかもしれない。しかし、子どもたちには、内村鑑三の個人の罪と個人の回心への焦点はあまり効果的ではないであろう。実際、内村鑑三の活動の特徴の一つは、子どもに対する働きかけが欠けていることである。このように、内村の最初の教会となった友人の集まりは、その後の彼の活動に大きな影響を与えたと考えられる。実際、このような友人関係の視点から見たとき、内村の罪の意識の変化は、友人たちの間で広く共通していた題材であった。しかし、もし内村や初期の友人たちが幼い段階でキリスト教を受け入れていたとしたら、内村の罪の意識もまた大きく異なるものになっていたかもしれない。

結論

内村の罪の意識の変化を良心の観点から見ると、クリスチャンになる前の幼少期から、内村は後に彼が道徳的分裂と表現するように、何が正しいかわかっていながら、それを実行できない悲しみと悩みを抱えていたことがわかる。彼は、儒教的な道徳観と神道的な宗教観を基礎として育った。しかし、彼は後に罪と表現する、良心との葛藤を抱えていた。そして、聖書に出会ったとき、最初はその物語を楽しんでいたが、聖書の教えとその要求は彼の良心にとってまず敵対するものであると捉え、その後受け入れたことを見てきた。聖書は彼に喜びを与え、さらに罪の確信を与え、そして葛藤を経て、1886 年に贖罪をより完全に理解したとき、ついに大きな喜びを得たのである。このような良心における罪の自覚の変化は、家族への視点にも表れていた。内村の家族への視点には、肯定的な側面と否定的な側面があり、そのために内村は家族について首尾一貫した表現をすることができなかったのである。しかし、「一般恩恵」という理解は、内村の家族の肯定的側面と否定的側面の双方を理解するのに役立つ分類であろう。さらに、彼の良心における罪の自覚の変化が、毎週集まっていた最初の教会の 7 人の兄弟たちを深い友情へと導いたことを見てきた。この小さな教会の最初の段階から、1886 年までの数年間に一歩ずつ変化していった人間関係の中で起こった試練を通して、

内村は神と人間、そして罪に対する理解を発展させたのである。やがて1886年、アマースト大学で、内村は神との平和、赦しについての深い理解、そしてそれとともに深い喜びを見出したのである。

註

（1） 内村鑑三『How I Became a Christian』内村鑑三英文著作全集第1巻、教文館、1971年。内村鑑三、鈴木範久訳『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、岩波書店、2021年。

（2） 鈴木、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、304－305頁　内村、『How I Became a Christian』、207－208頁。

（3） 内村によると、彼の生涯には三度大変化があったそうである：1）基督教になって、独一無二の神を認めた時。2）十字架において罪の贖いを認めた時。3）基督の再臨の確信を得た時。内村鑑三「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」1918年、『全集24』384頁。参考：李慶愛『内村鑑三のキリスト教思想 ── 贖罪論と終末論を中心として』九州大学出版会、2003年、3－4頁（注2）。

（4） 内村鑑三「良心の無き国民」1916年、『全集22』465－466頁。参考：岩野祐介『無教会としての教会 ── 内村鑑三における「個人・信仰共同体・社会」』教文館、2013年、101頁。

（5） 鈴木、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、26頁。

（6） 前掲書、26頁。

（7） 前掲書、31頁。

（8） 前掲書、34－35頁。

（9） 前掲書、35頁。元の英語はconscienceである。内村、『How I Became a Christian』、29頁。

(10) 前掲書、37－38頁。

(11) 内村、『How I Became a Christian』、41頁。

(12) 前掲書、125頁以下。

(13) 前掲書、153頁。

(14) 前掲書、160頁。

(15) 前掲書、160、165頁。

(16) 前掲書、24頁。

(17) 前掲書、25－28頁。

(18) 前掲書、27－29頁。

(19) 鈴木、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、32頁。

(20) 内村、『How I Became a Christian』、31 頁。
(21) 前掲書、39－40 頁。
(22) Albert Barnes, *Barnes' notes on the New Testament* (Grand Rapids: Kregel Classics, 1962). Online: https://www.amazon.com/Barnes-Notes-New-Testament-Albert/dp/0825422000
(23) 内村、『How I Became a Christian』、39－40 頁。
(24) 前掲書、37 頁。
(25) 前掲書、47 頁。
(26) 内村鑑三、佐々木忍（編訳）『現代に語る内村鑑三 ── ロマ書の研究』（上）、いのちのことば社、2018 年、29 頁。参考：Kei Chiba（千葉　恵）、"Uchimura Kanzo on Justification by Faith in His Study of Romans: A Semantic Analysis of Romans 3:19-31," pp. 162-197 in Hiroshi Shibuya and Shin Chiba (eds.), *Living for Jesus and Japan: The Social and Theological Thought of Uchimura Kanzo* (Grand Rapids: Eerdmans, 2013), p. 168.
(27) 内村、『How I Became a Christian』、18－19 頁。
(28) 前掲書、30－33 頁。
(29) 前掲書、46 頁。
(30) 前掲書、47 頁。
(31) 前掲書、47 頁。内村の首府にある自宅には家の偶像「family idols」があったということであるが、それは神棚か仏壇かはこの箇所には書いていないのであるが、102－103 頁を考えると、仏壇「ancestral shrine」のようで、そこで亡くなった祖父の霊に祈ることができるということである。
(32) 前掲書、102－103 頁。
(33) H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture* (New York: HarperCollins Publishers, 2001) 武田清子『土着と背教 ── 伝統的エトスとプロテスタント』新教出版社、1967 年、55－61 頁。
(34) 神棚に対する行為、あるいは仏壇に対する行為は厳密に偶像崇拝だと言えるかどうかはかなり議論されているところである。
(35) 鈴木、『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』、23 頁。
(36) 内村、『How I Became a Christian』、22 頁。
(37) 前掲書、28 頁。
(38) 前掲書、66 頁。
(39) 前掲書、63 頁。
(40) 前掲書、54 頁。
(41) 前掲書、66 頁。
(42) 前掲書、32 頁。

(43) 前掲書、48 頁。

(44) 前掲書、126－129 頁。

(45) T. J. Keller, and J. A. Thompson, *Church Planter Manual* (New York: Redeemer Church Planting Center, 2002), pp. 4-5; M. Robinson, and S. Christine, *Planting Tomorrow's Churches Today* (Kent: Monarch Publications, 1992), pp. 5-6.